

ドロシー・オズボーンの手紙 (Ⅲ)

岸本 広司

ドロシー・オズボーンは、結婚前に、のちに外交官・著述家として名を成すウィリアム・テンプルに多くの手紙を書いている。本研究は、これまでまとまった形ではほとんど論じられてこなかったドロシーの手紙を取り上げ、それらを通して結婚までの経緯をたどりながら、彼女の人物像、手紙に含まれる文学的意義、テンプルの思想や生き方に与えたであろう影響等を探ろうとするものである。小論では、「ドロシー・オズボーンの手紙 (Ⅰ)・(Ⅱ)」(本誌第161号・162号, 2016年)の続稿として、秘密裏の婚約、ドロシーの天然痘罹患、さまざまな障害を乗り越えての結婚、ムーア・パークでのハネムーン等を伝記的に考察した。

Keywords: ドロシー・オズボーン, ウィリアム・テンプル, 手紙, 結婚, 天然痘

11. 婚約

危機が去って以降の2人は、互いの愛を確認し、以前にもまして相手への思いを強めていく。1654年1月中旬、テンプルは1日だけチックサンズを訪れてドロシーと会った⁽¹⁾。それからしばらくのちに、テンプルはドロシーに指輪を贈った。それはドロシーが求めていた簡素な金のリングであった⁽²⁾。その内側にはこう刻まれていた。「わが愛は示すこと能わず」(“The love I owe I cannot show”⁽³⁾)。誰にも邪魔されない、2人だけの秘密裏の婚約であった。

婚約後のドロシーは、まるで何事もなかったかのように、以前と変わらぬ調子で、身近で起こった日常的なあれこれ、出会った人びとの人物評、読んだ書物のこと、見たこと、感じたこと、そしてテンプルへの思いを、自然な文体で語りかけるように手紙にしたためた。もはや迷うことのない、平穏な心持ちであった。しかし彼女の行く手には、相変わらずさまざまな障害があった。テンプルと別れていないことに感づいた兄のヘンリーは、テンプルは信仰心のない無神論者だと非難した⁽⁴⁾。それは当時の人びとが最も忌み嫌う言葉であり、敬虔なドロシーには、そのような兄の暴言は絶対許すことができなかった。他方、テンプルの父親もこれまでと同様反対の姿勢を崩していなかった。ところが、しだいにテンプルとドロシーを取り巻く状況が変わってくる。1654年3月11日に、サー・ピーター・オズボーン

が息を引き取った⁽⁵⁾。彼は末っ子のドロシーをとりわけかわいがっており、彼女にとっては「世界で最高の父親⁽⁶⁾」であった。死は前々から予想されていた。しかしいざ死に直面すると、ドロシーに耐え難い悲しみと寂寥感が襲ってくる。7カ月前に兄のロバートが死んだとき以上の心の痛みであった。だが父親の死は、結婚においては家族、とりわけ父親の同意こそが絶対条件であるという、当時の宗教的・倫理的な規範から解放されることを意味した。葬儀の日、早くもドロシーはテンプル以外の誰とも結婚するつもりはないことを兄のヘンリーにはっきりと伝えている⁽⁷⁾。

テンプルの父親もしだいに軟化していた。前述の危機のとき、逆上したテンプルを見て驚いたサー・ジョンは、これ以上強硬に反対すれば、息子の身に恐ろしいことが起こるかもしれないと心配し始めていた。ドロシーの父親が死んだのと同じ3月、テンプルは15歳の妹マーサとともにアイルランドのダブリンに向けて海を渡っている。父親が共和政府の役人としてダブリンに赴任しており、その父親を説得して、結婚の同意を取り付けるためであった。懸命の説得を試みたことであろう、ようやく承諾を得ることができた。テンプルが朗報を携えてイングランドに戻ったのは、渡愛半年後の9月のことである。このダブリン滞在中、テンプルはドロシーに情熱的な手紙を書いている。2人が交わした手紙のなかで、

岡山大学大学院教育学研究科 名誉教授 700 - 8530 岡山市北区津島中3 - 1 - 1

The Letters of Dorothy Osborne (III)

Hiroshi KISHIMOTO

Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

テンプルのはわずか1通しか残っていないことは再三述べたとおりであるが、その1通というのがこの手紙にほかならない。

「あなたが私をまだ愛してくれていることは知っています。あなたはそれを約束してくれましたし、それこそが、私がこの世で獲得できる最高の価値に対する最大の保証となるものです。それに比べれば、ほかのものはすべて無価値に思えるくらい、それは私の心を高揚させます。実際あまりにも高揚するので、もし墜落でもすれば、粉々に砕かれてしまうことでしょう。私はあなたから遠く離れた所にいますから、以前よりもずっと不幸な思いをしていることを知れば、あなたはその慈悲心でもって、今まで以上に私を愛すべきだと思います。正義の女神は、きっとそうせよと命ずるでしょう。いかなるものよりもはるかに価値のある私の情熱に報いるものは、この世には〔あなたの愛以外〕何もないのですから。たとえあなたが再び私の生命を救い、私をあなたの運命とあなたという人間に対する絶対的な支配者にしようとも、もし私を愛してくれていなければ、いかなる形の報酬であれ、それを一切受け取らず、私より愛情の薄い人だと見なすことでしょう。このようなことを言うのは、うぬぼれからではありません。私の情熱がいかに純粋で、いかに洗練されたものであるかを本当に知っているからなのです。そしてその情熱の性質は、私の心のなかに入り込んでみないかぎり、誰にもわからないものなのです。／あなたに手紙を書いていると、書き終わるのが何と辛いことでしょう。でも仕方ありません。私はいつもほかの人たちの要求を受け入れて、自分のことを決して優先させてはならないと思っていますから。⁽⁸⁾」

12. 罹病

さて、父親を亡くしたドロシーは、チックサンズを出て親戚の家で世話になることになった。長兄のジョンが家督を継ぎ、その家族が転居してきたからである。親戚に身を寄せることになったドロシーは、肩身の狭い思いや不愉快な思いをしたようである。彼らのことを「友人ではない親戚の人たち⁽⁹⁾」と呼んでいる。けれども結婚を決意したドロシーには、もはや怖いものはなかった。安住できる家はなくても、一時の辛抱だと思えたとし、嫉妬深い兄がたとえ妨害しようとも、それをはねのけるだけの自信と覚悟があった⁽¹⁰⁾。結婚前の財産分与をめぐる両家の交渉、いわゆる「婚姻継承財産設定」(marriage settlement⁽¹¹⁾)に関する話し合いも、紆余曲折あつ

たものの10月までには基本的に片づいた。彼女の心はすでにテンプルとの新婚生活の方に向いていた。1654年10月2日付の手紙（現存する一連のテンプル宛書簡の最後のもの）で、晴れ晴れとした気持ちでこう書いた。「あなたは私という素晴らしい主婦をおもちになることでしょう。私はまだベッドにいます。とてもよく眠っていましたので、あなたのお手紙が来なければ目覚めなかったでしょう。食事が済み次第お手紙を出します。さようなら、と言っても平気でしょうか？ いいえ、とんでもありません。じきにお会いいたしましょう⁽¹²⁾」。

ロンドンの親戚に滞在していたドロシーは、7月にケント州ノールトンのサー・トマス・ペイトンの館に移った。ペイトンは、12年前に死んだドロシーの長姉エリザベスの夫である。彼は妻の死後、ロンドン市長の未亡人であるセシリアと再婚しているが、セシリアは万事派手好みで、連日のようにパーティを催していた⁽¹³⁾。静謐を好むドロシーが、この家でも落ち着くことができなかったことはテンプルに伝えているとおりである⁽¹⁴⁾。ドロシーはペイトン邸に3カ月あまり寄寓した。そしていよいよ結婚の段取りとなる。10月17日、ドロシーは結婚式を迎えるためにペイトン邸を辞し、セシリアたちとともにロンドンへ出京した。兄のヘンリーは、その日のことを日記にこう書いた。「10月17日、火曜日。ペイトン夫人と妹たちはノールトンからロンドンへやって来た。……妹は私の宿所へ来て私と夕食を共にした。そのとき彼女は、『テンプルと結婚する』とはっきり言った⁽¹⁵⁾」。ドロシーの決意が固いことは、ヘンリーにはもちろんわかっていた。また、オズボーン家の者もすでに結婚に同意していた。にもかかわらず、ヘンリーは婚約解消にわずかな望みをかけていた。そのためドロシーのこの言葉は、ヘンリーにはまるで絶縁宣言のように聞こえたに違いない。

ドロシーにとって、結婚を阻む障害はもはや何もなかった。式の日取りも決まり、すべてが順調に進んでいた。否、順調に進んでいるように見えた。だが運命は苛酷であった。ドロシーに想像もしていなかった不幸が降りかかる。ロンドンへ出てきたその日の夜、ドロシーはペイトン夫人とともにドルリー・レーンの知人宅で宿泊した。ところがその家には天然痘患者がいた。そのためクイーンズ・ストリートの別の知人宅へ移動したが、ドロシーはこのときに感染したようである。半月あまりの潜伏期間を経て発症した。「11月9日。妹が天然痘にかかった⁽¹⁶⁾」とヘンリーは記している。ジファード夫人もこう書いた。「この恋愛の不幸はまだ終わらなかった。結

婚式を挙げる前の週に、彼女は回復する見込みがないほど重い病気になってしまった¹⁷⁾。

モンタギュー夫人がトルコ式人痘接種法をイングランドに導入したのは1721年、エドワード・ジェンナーが天然痘ワクチンを開発したのは1796年である。ドロシーが罹患したのは、モンタギュー夫人の人痘法より70年近く前、ジェンナーのワクチンより140年以上も前のことである。天然痘は感染力が強く、死に至る病として人びとからたいへん恐れられていた。紀元前から世界各地で発生していたが、イングランドでもしばしば流行し、日記作家として有名なサミュエル・ピープスは、「とくに注目すべきはこの2カ月間に天然痘がひどく流行ったことで、このような季節はほとんど記憶にない¹⁸⁾」と、1668年2月に記している。また同じく著名な日記作家であるジョン・イーヴリンも、「天然痘が蔓延している。命を奪う非常に怖い病気だ¹⁹⁾」と、1695年1月に書いている。17世紀イングランドにおける天然痘の患者数や死亡者数は明確でないが、1634年にはロンドンで1000人以上が死んだと言われている²⁰⁾。ちなみにイーヴリンの場合、1685年の3月と7月に娘とその婚約者を、8月には2人目の娘を立て続けに天然痘で亡くしている。

この病気にかかると、前駆期にはまず40度前後の高熱、頭痛、四肢痛、腰痛などに襲われる。やがて一時的に解熱傾向となり、頭部や顔面を中心に天然痘に特徴的な豆粒状の発疹が現れる。しばらくすると発疹は膿疱となり、再び高熱に襲われる。この発疹期には、嚥下困難、呼吸障害等を併発し、重篤な場合は衰弱して死に至る。2週間から3週間経過すると膿疱が乾いて瘡蓋となり、熱も下がって治癒に向かう。しかし瘡蓋がとれると瘢痕、いわゆるあばたを主として顔に残す。瘢痕が角膜上に生じれば失明の原因ともなる。運良く死神から逃れることができて、あばたは若い女性にとってきわめて深刻で、残酷なまでの後遺症であった。自身も天然痘のために醜い容貌になったと言われる文人オリヴァー・ゴルドスミスは、ドロシーが罹患した約100年後に次のような詩を詠んでいる。

見よ！ ぞっとするような目でにらみつける
天然痘が、
その恐怖の矢を美しい人に向けた。
若々しい魅力を根こそぎにしたあと、
顔に残すはただ醜い傷痕のみ²¹⁾。

ドロシーも、おそらくこのような経過をたどったことであろう。ジファード夫人によれば、病状は非常に重く、医者たちも助かる見込みはほとんどないと診断していた²²⁾。テンブルは感染する危険を顧み

ることなくドロシーに付き添った。彼は、このときのことについてまったく何も書き残していない。さまざまな障害を乗り越えて、やっと結婚1週間前までこぎ着け、おそらく幸せの絶頂を迎える矢先の出来事である。その心中は推して知るべしであろう。

当時、天然痘にかかっても医者は有効な治療を施すことができなかった。医療水準は低く、患者を前にして医者はほとんど無力ですらあった。もちろん、さまざまな治療法がなされてはいる。しかし、それは他の病気に対するのと同じごくありふれたやり方、すなわち、熱を下げるために静脈を切開して瀉血したり、胃や腸を洗浄するために下剤や嘔吐剤を服用させたりするといったものであった²³⁾。時には、30匹から40匹のヒキガエルを乾燥させて粉末にしたものを治療薬として用いるという、呪術的な民間療法と区別のつかないものさえあったようである²⁴⁾。このような処置は、病気を治すどころか、むしろ衰弱している患者の病状を悪化させがちであり、最悪の場合は死なせてしまうということすらしばしばあった。後年テンブルは、『健康と長寿について』(*Of Health and Long Life*, 1701) と題したエッセイを書いている。そのなかに、医者に対する不信感をあらわにした箇所がある²⁵⁾。それは、危険な状態にあるドロシーにまったく有効な治療を施しえない、このときの医者に対する怒りやもどかしさを思い出しながら書いていたものなのかもしれない。

命が危ういと言われたドロシーであるが、かろうじて一命を取り留めることができた。テンブルにとっては、この上ない喜びであったに違いない。だが治癒したとはいえ、彼女も天然痘特有の後遺症から逃れることはできなかった。ドロシーは評判の美人であった。サー・ピーター・レーリの描いた肖像画がその美しさを伝えている。彼女の母親は、「今この世にいる友達が皆死んでしまっても、お前の眼差しはそれ以上悲しげになるまいよ²⁶⁾」と言っていたという。母親の言葉どおり、肖像画に描かれたドロシーの目は愁いを帯び、知的で気品に満ちた姿で静かにある一点を見つめている。おそらく多くの男性が彼女に魅了されたことであろう。毎月のように求婚者が現れたというのも、決して故なきことではなかった。その容貌が一変したのである。「彼女の美貌があまりにも損なわれてしまったので、彼〔テンブル〕もまったく平気ではいらなかった²⁷⁾」とジファード夫人は書き残している。テンブルはのちにエッセイで、「美が心地よいのは、それが美を享受している当人よりも、むしろ他の人たちに幸せをもたらすからだ²⁸⁾」と述べている。その美が、無惨にも破壊されてしまったのである。これと同様の

ケースから、婚約を破棄された女性が多くいたことは歴史が示している。ゾフィー・フォン・デア・ブファルトツやマリア・エリーザベトの場合が好例であろう。しかしテンプルは、ドロシーにはそうした可視的な美以上の美があることをよく知っていた。なるほどピープスも、天然痘にかかった女性の「美の移ろいやすさ²⁹」に言及している。だがテンプルは、手紙を通してドロシーの人格や考え方を熟知しており、彼女の内面のなかに「移ろいゆくことのない美」を洞見していた。2人にとって手紙は単なる情報伝達手段ではなく、それ以上のものであった。それは心の底からの対話であり、詩人ジョン・ダンの言う「魂を1つにする」ものにはかならなかった。「多くの口づけよりも、手紙の方が魂を1つにする。／離れた友人たちは手紙で語り合う³⁰」。かくしてテンプルは、躊躇することなくドロシーと結婚する³¹。

13. 結婚とハネムーン

ドロシーの病気が癒えて数週間後の1654年12月25日、クリスマスの日に2人は結婚式を挙げた³²。式場は、ロンドンのオックスフォード通りとチャリング・クロス通りが交わる地点に建つセント・ジャイルズ・イン・ザ・フィールズ教会(St. Giles-in-the Fields Church)であった³³。挙式の詳細は不明である。前年の「ベアボーンズ議会」(Barebone's Parliament) すなわち「指名議会」(Nominated Parliament) で、婚姻とは民事的な契約であるという考え方にに基づき、結婚は男女が治安判事の前で婚姻を誓うことによって法的に有効になると規定した婚姻法(Marriage Act)が制定されていた³⁴。そのためドロシーたちも、この新法に従って挙式したと思われる。もっとも、ドロシー自身は世俗化された新しい結婚式のスタイルよりも、宗教儀式に則った伝統的なやり方の方がずっと良いと考えていた³⁵。また、従来から人がたくさんいる場所へ行くのを好まなかったドロシーは、「たとえ世界で一番幸せになるためであっても、花嫁が結婚式で人前にいなければならないのは、私には耐えることができません³⁶」と述べていた。さらに挙式が終われば、あたかも駆け落ち婚のように、人に知られないようこっそり馬車に乗って、遠くへ出かけてしまいたいとも言っていた³⁷。したがって挙式も祝宴も、何らかの形でドロシーの意向を反映したものであったのではないかと思われるが、ともかくも2人は、さまざまな障害を乗り越えて7年越しに結ばれたのであった。

ハネムーンを過ごしたのは、ハートフォードシャーのムーア・パークにあるサー・リチャード・フランクリンの屋敷においてである。フランクリン

はテンプルの友人で、妻のエリザベスはドロシーの親戚であった。ムーア・パークは、ロンドンの中心から北西約20マイルのリックマンズワース(Rickmansworth)近くに位置し、壮麗なパラディオ様式の「ムーア・パークの館」(Moor Park Mansion)で知られている。もっとも、現存するその館が建てられたのは1720年代であり、テンプルたちが過ごしたのは、それ以前に建設された別な建物であった。だがそれは今は残っていない。ここでの滞在中、テンプル夫妻を魅了したのは屋敷内の庭園であった。以前、思うように進展しない結婚問題にやきもきしていたテンプルが、しばしばフランクリン邸を訪れ、庭に建つレダ像に語りかける詩を窓ガラスに書きつけていたことは前述したとおりである。そのとき彼の見た庭園と、ドロシーと一緒に見るそれとの間に異なるところは何もない。しかし、この庭園から受けた彼の印象そのものは、結婚前と結婚後では自ずと違っていただことであろう。

庭園を造営したのは、ベドフォード伯爵夫人ルーシー・ラッセル(旧姓ハリントン)である。彼女は多くの詩人や文人を庇護し、彼らのサークルの中心となって活躍した才気煥発な女性であった。彼女は生涯に2つの造園を手がけている。1つは、詩人ジョン・ダンが伯爵夫人に捧げた詩で有名なトゥイクナム庭園(Twickenham Park)、いま1つは、1617年にトゥイクナムを手放したあと、ジェイムズ1世から下賜された新たな地に、10年の歳月をかけて造営したムーア・パークの庭園である。彼女の死後、ムーア・パークは人手に渡るが³⁸、フランクリンはそれをテンプル夫妻が寄留する2年前の1652年に購入していた。

ムーア・パークの庭園は、全体が幾何学模様設計されたイタリア・ルネサンス様式の整形式庭園であった。周囲は壁などで囲まれ、四角の庭にはさまざまな樹木と色とりどりの花が規則正しく植えられていた。邸宅の前庭はテラス式で、人工の洞窟、大理石の水盤、噴水、彫像などが配置されていた。テンプルは『エピクロス庭園』で、ムーア・パークの形態と配置を詳細に記している。そしてそれを「最も美しく完璧」で、「私が生涯において見てきたなかでも最も甘美な空間³⁹」と絶賛している。後年テンプルが自らの庭園を造るにあたり、このムーア・パークを参考にしながら造園したことは間違いないであろう。われわれは彼の庭園論を考察する際、このムーア・パークに再び立ち返ることにしたい。

テンプルとドロシーは、ムーア・パークでしばらくの間過ごした。ドロシーの持参金をめぐって問題はまだ残っていたものの⁴⁰、2人の生涯のなかで最

も幸福な日々であったことであろう。多くの不幸に見舞われ、幾多の障害を乗り越えてたどり着いた結婚であったからこそ、その幸福感はなおさら強かったはずである。それから26年後、2人はサリー州のファナム近くに土地を購入している。そしてそこをムーア・パークと名付けている。静けさを希求する2人の晩年は、逆縁というさらに大きな悲劇に見舞われながら、そのムーア・パークで送られることになるのである。（以下、次号）

- (1) ドロシーはテンプルとの別れを決意したとき、兄のヘンリーに、テンプルとの結婚話はなくなったと報告していた。ヘンリーは日記に、「11月29日。妹はテンプルと結婚しないことに決めた」（“Henry Osborne’s Diary,” [29 Nov. 1653], 325）と書いている。翌年の1月にテンプルがチックサンズに来たときも、ドロシーに最後の別れを告げるために来たのだと受け止めており、この時点では、テンプルと別れたというドロシーの言葉を疑うことはなかった。「1月13日、金曜日朝。私はディナーの前にチックサンズへ来た。ここでテンプル氏と〔偶然〕出会った。妹は彼との関係を絶った。神に感謝する」（*Ibid.* [13 Jan. 1654], 325）。
- (2) Dorothy to Temple (14 Jan. 1654), Letter 54, in *Dorothy’s Letters*, ed. Parker, p. 168. さらにテンプルは、ドロシーの求めに応じて一房の髪の毛を贈り、それに対してドロシーの方も自分の肖像画を贈っている。当時、恋愛している男女はよくプレゼントを交換したが、それは愛を誓い合った印として重要な意味をもつものであった。
- (3) William C. Grayson, *Chicksands: A Millennium of History* (Crofton, Md.: Shefford Press, 1994), p. 66; Dunn, *Read My Heart*, p. 158, n.
- (4) Dorothy to Temple (11 or 12 Feb. 1654), Letter 58, in *Dorothy’s Letters*, ed. Parker, p. 178.
- (5) “Henry Osborne’s Diary,” (11 Mar. 1654), 326.
- (6) Dorothy to Temple (18 Mar. 1654), Letter 62, in *Dorothy’s Letters*, ed. Parker, p. 191.
- (7) “Henry Osborne’s Diary,” (13 Mar. 1654), 326.
- (8) Temple to Dorothy (18 May 1654), in *Dorothy’s Letters*, ed. Parker, Appendix B: William Temple’s Letter from Ireland, pp. 311-12. セシル『二つの静かな人生』89-90頁の訳文参照。
- (9) Dorothy to Temple (18 Mar. 1654), Letter 62, in *ibid.*, p. 191.
- (10) ドロシーから結婚の意志が固いことを告げられたヘンリーは、嫉妬心や復讐心を募らせ、テンプルとドロシーの悪口を世間に言いふらし始めた。

ドロシーは怒りの感情を込めて書いている。「私に復讐することを決意した兄は……私をひどく苦しめています。兄の仕打ちは、（少なくとも私には）非常に野蛮で残酷なように思われます。そのため私は、兄の侮辱的な言動すべてを完全に許すだけの慈悲心をもっているつもりですが、残念ながら彼を兄と見なすことははやないだろうと思います」（*Ibid.*, p. 191）。

- (11) 婚姻継承財産設定については、以下を参照されたい。栗原真人「婚姻継承財産設定 Marriage Settlementの歴史的意義をめぐって」（『香川法学』第1巻第1号、1982年）、137-76頁。川北稔「名誉革命期地主社会の変容とマリジ・セツルメント——『ハバカク・テーゼ』をめぐる諸学説」（村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェントルマン——その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1995年）、118-55頁。
- (12) Dorothy to Temple (2 Oct. 1654), Letter 77, in *Dorothy’s Letters*, ed. Parker, p. 216. セシル『二つの静かな人生』96頁の訳文参照。
- (13) ドロシーはペイトン邸に寄寓する前年、セシリアを評して「このご夫人は陽気で自由奔放、カード遊びと社交を好み、人がたくさんいるのを見たときに一番喜びを感じる方です」と述べていた。Dorothy to Temple (24 or 25 Sept. 1653), Letter 41, in *ibid.*, p. 138.
- (14) Dorothy to Temple (4 July 1654), Letter 69; (22 July 1654), Letter 72, in *ibid.*, pp. 204, 208.
- (15) “Henry Osborne’s Diary,” (17 Oct. 1654), 326.
- (16) *Ibid.*
- (17) Giffard, “The Life and Character of Sir William Temple,” in *Early Essays and Romances*, p. 7.
- (18) *Diary of Pepys* (9 Feb. 1668), IX, p. 58（臼田他訳、第9巻、68頁）。
- (19) John Evelyn, *The Diary of John Evelyn*, ed. E. S. de Beer (London: Oxford University Press, 1959), p. 990.
- (20) Ian Glynn and Jenifer Glynn, *The Life and Death of Smallpox* (New York: Cambridge University Press, 2004), p. 39. 種痘が導入されるまでの18世紀イングランドにおける天然痘の患者数、死亡者数、死亡率等については、Peter Razzell, *The Conquest of Smallpox: The Impact of Inoculation on Smallpox Mortality in Eighteenth Century Britain* (Sussex: Caliban Books, 1977), pp. 113-39を参照されたい。
- (21) Oliver Goldsmith, ‘The Double Transformation: A Tale’ 77-80, in *The Collected Works of Oliver*

- Goldsmith, ed. Arthur Friedman, 5 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1966), IV, pp. 370-71.
- (22) Giffard, “The Life and Character of Sir William Temple,” in *Early Essays and Romances*, p. 7.
- (23) ジョン・イーヴリンは1646年に旅先のジュネーヴで天然痘にかかっているが、そのときに受けた治療も瀉血やヒルに血を吸わせるというものであった。*Diary of Evelyn*, p. 264.
- (24) リチャード・B・シュウォーツ／玉井東助・江藤秀一訳『十八世紀ロンドンの日常生活』（研究社出版，1990年），188頁。
- (25) William Temple, *Of Health and Long Life*, in *Works*, III, pp. 289 ff.
- (26) Dorothy to Temple (23 or 24 July 1653), Letter 31, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p. 117.
- (27) Giffard, “The Life and Character of Sir William Temple,” in *Early Essays and Romances*, p. 7.
- (28) William Temple, *Of Health and Long Life*, in *Works*, III, p. 267.
- (29) *Diary of Pepys*, IX, p. 135（臼田他訳，第9巻，142頁）。
- (30) John Donne, “To Sir Henry Wotton,” 1-2, in *John Donne: The Complete English Poems*, ed. A. J. Smith (London: Penguin Books, 1971), p. 214（湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』名古屋大学出版会，1996年，308頁）。
- (31) もちろん筆者は、愛を貫くテンブルのこうした行動を、ヴィクトリア朝時代によく見られたようなヒューマニズムあふれる美談や感動物語にするつもりはない。たしかに、本文でも挙げた婚約破棄というケースがあったことは事実である。だがそれとは逆の事例、すなわちテンブルと同様の事例がほかにあったことも事実であり、そのことを指摘しておかねば公平性を欠くであろう。たとえば、テンブルの同時代人で、詩人、翻訳家、伝記作家として名を残したルーシー・ハチンソンは、18歳で結婚する直前に天然痘に罹患した。無事治癒したものの、後遺症によって容貌が大きく損なわれてしまった。しかし婚約者のジョン・ハチンソン——議会軍の将校で、チャールズ1世の処刑に署名した弑逆者——は、そのようなことをまったく意に介することなく、病氣回復後直ちに結婚した。夫の回想録を著したルーシーは、その経緯を簡潔に次のように記している。「両家の関係者が婚姻契約に合意するために集まったその日、彼女〔ルーシー〕は天然痘にかかった。それは、彼〔ジョン・ハチンソン〕にとって多くの点でたいへん大きな試練であった。まず第1に、彼女の命がほとんど絶望的なまでに危険だったからであり、第2に、その病氣のために彼女の容貌が極端に醜くなってしまったからである。その醜さは、病氣から回復したあとも長期間そのままであった。けれども彼は、そのようなことにまったく拘泥しなかった。病氣が癒えると直ちに彼女と結婚した。司祭をはじめとするすべての者が、彼女を見てひどく驚いたにもかかわらずである」(Lucy Hutchinson, *Memoirs of the Life of Colonel Hutchinson, Governor of Nottingham Castle and Town*, 2nd edn. [London, 1808], p. 45)。
- (32) 「12月25日，月曜日。妹はクリスマスの日に結婚し，以前から彼女が言っていたように，フランクリン氏の屋敷へ行った」(“Henry Osborne’s Diary,” [25 Dec. 1654], 326)。
- (33) 画家兼版画家のウィリアム・ホーガースに，ロンドンの1日を描いた4枚組銅版画《一日の四つの時》(*The Four Times of the Day*, 1738)がある。そのうちの2枚目《昼》(*Noon*)の遠景に，この教会の尖塔が描かれている。
- (34) “An Act Touching Marriages and the Registering Thereof; and Also Touching Births and Burials” in *Acts and Ordinances of the Interregnum, 1642-1660*, ed. C. H. Firth and R. S. Rait, 3 vols. (1911; rpt. Holmes Beach, Fla.: W. W. Graunt, 1969), II, pp. 715-18. この新法が社会に与えた影響や人びとの反応については，Chris Durston, “‘Unhallowed Wedlocks’: The Regulation of Marriage during the English Revolution,” *Historical Journal*, 31/1 (1988), 45-59を参照されたい。
- (35) Dorothy to Temple (13 or 14 Aug. 1653), Letter 35, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p. 126.
- (36) Dorothy to Temple (15 June 1654), Letter 67, in *ibid.*, p. 202.
- (37) *Ibid.* ドロシーは盛大で乱痴気騒ぎの結婚式を嫌っていた。「祝祭ゲーム」としての当時の結婚式については，ジョン・R・ギリス／北本正章訳『結婚観の歴史人類学——近代イギリス・一六〇〇～現代』（勁草書房，2006年），86-133頁を参照。
- (38) この地の所有権は，まず1627年にペンブルック伯ウィリアム・ハーバート，次いで31年にモンマス伯ロバート・ケアリ，そして52年にサー・リチャード・フランクリンへと移転している。その後も所有者は転々とし，現在，ムーア・パークはゴルフコースになっている。
- (39) William Temple, *Upon the Gardens of Epicurus*, in *Works*, III, pp. 228-29.
- (40) ドロシーの財産分与をめぐる両家の交渉は，前

年の10月までに基本的に片づいていたが、いまだ完全には決着していなかった。その原因は、ドロシーの兄のヘンリーにあった。ドロシーの父親は、持参金として彼女に4000ポンド遺し、父親代わりのヘンリーがそれを分割でドロシーに支払うことになっていた。だがヘンリーは約束を履行せず、支払いを引き延ばした。持参金の一部を自分のものにしようとしたのである。そこでテンプルとドロシーは、結婚の翌々月に大法官府裁判所

にヘンリーを提訴した。この問題が最終的に決着したのは、結婚7カ月後の1655年7月20日のことである。この訴訟問題については、Kenneth Parker, “Appendix F: Litigation between William and Dorothy Temple and Sir Henry Osborne, Kt.,” in *Dorothy’s Letters*, ed. Parker, pp. 327-31; Moore Smith, “Epilogue II,” in *Dorothy’s Letters*, ed. Moore Smith, pp. 185-94を参照。

